がある。（賣價一三・八〇、大坂だるまや書店發賣）（以上岩橋）

●慶州金冠塚と其の遺寶　上冊

大正十年の秋、新羅の舊都慶州邑の入口に於いて偶然發見せられた一積石塚の埋藏品は、其の質より見るも、また量の上よりするも、我が領土内空前のことに屬し、東亞に於けるツタンカーメンの墓とも云ふ可き重要さを持つ一大發見であつた。されば朝鮮總督府では當初關野、濱田兩古蹟調査委員等に囑して實地の調査を行ひ、後遺物の京城に移さるゝや、濱田博士監督の下に、梅原、小川兩囑托をして專ら整理に任に當らしめて完全なる報告書の作製を期したが、爾來三年の歲月を費して頃日やうやく全部の調査の完成を見るに至り、今まや濱田梅原兩氏の提出した本文と圖版との二部より成る報文の上半が、「慶州金冠塚と其遺寶」と題して、總督府の古蹟調査特別報告の第三冊として印行を見たのは大いに慶賀すべきことである。本報告の本文は四六倍版百七十六頁と英文の梗概三十頁とから成つてゐて、初に古墳の形狀と封土の築成とを說き、發掘に從事した諸鹿、大坂等諸氏の云ふ處に基き副葬品の埋沒狀態を叙して棺槨の構造に及び、出土の品目を列記して遺物の豐富さを示して第一章の序說を終へ、第二章以下を一々の遺物の起述に當てゝ、先づ初に各種の容器類の章を設け、土器からはじめて、鐵釜、金屬製容器、漆器及木器玻璃器等と節を分つて器形から其の特質に亘り記載する處あり、第三章は裝飾品の（一）として、精巧な黃金製の耳飾をはじめ、頭飾の玉、釧及指輪、金色粲然たる銙帶類と腰佩願等被葬者の佩した裝身具を細說し、なほ二足の飾履を擧げて上冊を終へ、金冠はじめ自餘の裝身具馬具、武器其他を下冊に讓つてゐる。別冊の圖版は如上の記述に對應する遺物の集錄であつて、四六四倍版の大きに精巧な玻璃版に色刷なぞを加へて、其の復寫に意を用ひた堂々たるもの、金冠塚の報告としてふさわしい感を與へる。上に記した遺寶の報告は稀に見る精良品を諸方面から觀察記載すると共に、これを既出の諸例と比較し、また東西の文獻、遺物を參酌して一々の源流に遡りて其の性質を明確なら

しむるに意を用ゐてゐる。從つて名は一古墳の報告であるが、同時に從來の發見品から歸納した東亞考古學上の業績の一集積とも見る可く、内に含まるゝ漆器、玻璃器、帶飾等に關する研究は西人の參考にも資すべきである。下冊が完結せられたら一層光輝を放つことであらう。（總督府印行、非常品）

◎加賀能登社寺舊跡古城址殖產遺跡

石川縣史蹟名勝調査報告第二輯として印行せられたもので、委員上田三平氏の編著にかゝり、體裁すべて第一輯に等しく、四六倍版本文九十八頁、圖版三十二葉、挿圖二十の冊子で、歴史時代に屬した表題の各種類の史蹟に解説を加へてある。先づ社寺としては能登に於ける國分寺址をはじめ、加賀の總社址、縣内に於ける古堂塔の礎石と發見の古瓦、白山、石動山等の名山に關係を持つ遺跡、總持寺、安國寺利生塔址、超勝生址等各時代に亘る遺跡の調査を收め、古城址關係では有名な倶利加羅の古戰場から、大聖寺城、穴水城、木尾獄城、七尾城、小松附近の諸城、鳥越、末松等の主なる諸城址を綱羅し、また鳳至郡中居村にある鑄物師の遺跡と、有名な九谷の窯址とを紹介して附するに石川郡笠間村にある立石を同郡山島村の石佛との現狀報告を以てしてゐる。是等の一々の起述は遺跡そのものゝ實際を忠實に錄することに意を用ひてあると同時に、それが歴史時代のものであることから、調査をば文獻上にも及ぼして、其の沿革を論じ挿むに大類博士はじめ專門家の研究の業蹟を以てして說明を助けてゐる處など、著者の用意甚だ周到であり、地方史蹟の紹介書として出色のものなるは云ふを俟たない。たゞ記載があまりに多方面に亘つてゐるので、上田氏の博識を以てしてなほ其の記述に往々誤謬の見受けられることは遺憾の事である。一例を擧げるならば第六〇頁に擧げられた文書に於いて著者が侏儒と讀んでゐる處の如き圖版第四二に對照すると、それは明に陣僧とすべきで、前者は誤讀と云ふ前もたまたま文書が圖版に收められた爲に究め得たのである。然しこの如きは固より白玉の微瑕で本書の價値を上下するものではなからう。（石川縣印行、縣にて實費領布）

◉岩手縣史蹟名勝天然紀念物調査報告　第四冊

收むる處同會委員小田島祿郎氏の執筆した縣下に於ける竪穴及チャシに關する調査の内の前者に關する報告であつて、氏の熱心な探究に依つて前年來岩手郡一方井村を中心として多數に發見せられた彌生式土器及び鐵器片を包藏する竪穴群に就いて綜合的に記述したものである。菊版五十頁ある本文に於いて、先づ岩手縣下に於ける同種の竪穴の分布と其の形態の一斑を擧げ、ついで右の一方井と二戸郡の各地にある一々の竪穴群の實際に就いて說くところあり、以下竪穴の埋沒狀態と遺物散列地の關係、竪穴の内部の形態の考察と、遺物の包含狀態、發見の遺物、穴内の設備等に項を分けて細說し、なほ竪穴の示す處から當時既に一部に農業の行はれてゐたことに記述を及ぼし、結論として此種の竪穴の性質を概括してゐる。而して如上の記述と參照すべく、卷末に、竪穴の分布圖はじめ、顯著な遺跡の形狀圖出土の遺物の寫眞等二十葉の圖版を附して遺跡の性質の究明に資してある。報告書中交ゆる著者の多くの見解の中にはなほ考慮の餘地の存するものも見受けられる樣であるが、一々の遺跡が忠實に記錄せられてゐる點から、遺跡そのものが奈良朝から平安初期に亘り日本人の祖先の遺したことを推測せらるゝ上代奥州の拓殖史上に重要な關係を持つものなるに於いて、永く學界に寄與する處あるべき好著なのを信じて著者の努力に對して敬意を表する次第である。（岩手縣發行、非賣品）

◉人類學及人種學上より見たる北東亞細亞

文學博士　鳥居龍藏著

著者鳥居博士が大正八年に試みられた東部西伯利亞の學術探檢は同地域に對する本邦學者の行つた最初の世界的の壯擧であつて、齎し歸られたところの大なるを聞くにつけ其の調査研究の結果の一日も早く公にせられることを冀望するのは單に一部の人士のみにとゞまらないのであるが、これに就いては大正十一年に朝鮮總督府から古蹟調査特別報告の第二冊として「北滿州及び東部西伯利亞調査報告」と題する簡潔な調査の梗概が公にせられ

たに過ぎなかつた。されば這般公にせられた表題の一書は同じ地域を綜括對象こせられてゐるに於いて著しく注目を惹くところのものである。本書雍を西伯利亞調査の必要なる所以に起し、浦潮、イルクーツク、チタ、チヽハル、ブラコベチエンスク、ニコラエフスク、ハバロフスク等著者の調査の行程に從つて各般の事項を叙し、更に大正十年夏に於ける北樺太、サハレン州の探檢の經過にも及び、附錄こして「北樺太、及黑龍江下流の民族に就て」こ「間宮林藏氏こ樺太及び東韃地方この關係に就て」の二編があり、本文四六版ポイント組五百頁に上りなほ卷頭三十餘の挿圖を加へた容量の甚だ大なるものである。然しこれを讀むに其の序文にも云つてゐる如く、やはり旅行記であつて、內容に於いて前記の總督府印行の報告こ殆んご差違のなきもの。從つて表題に示されてゐる樣な綜括的の研究が見られない。尤も本書の記述は非常に詳密で、大抵の事は繰返して二度づヽ說かれてゐるので、前者で不備の點がよく補はれてあるし、其の文は遺物遺跡や人種そのものよりも其の環境特に西伯利亞の風物を叙する處詳しく且つ美しい文章をしてゐて讀む間に自ら身共にあるの思ひあらしめ、また調査の困難に對して拂はれた努力を讀むにつれて今更ながら博士に敬意を表する心持ちになる。蓋し博士にこつて此の一書は忘れ難い記念であらう。たゞ吾々は本書を手にするにつけかゝる多大の苦心を以てした著者の調査研究の成果が一日も早く發表せられることの期待を一層深くする次第である。（東京圖書院發行、價三・八〇）

◉慶尙南北道忠淸南道古蹟調査報告

朝鮮總督府大正十一年度古蹟調査報告書の第一冊こして印行せられた同府古蹟調査委員藤田亮策、同囑托梅原末治、小原顯夫三氏の提供に係る報文である。四六倍版本文三十六頁、圖版三十五葉から成つて、載するところは慶尙南道に於ける金海、梁山二貝塚の調査概要から、慶州發見の石器に關する起述こ、其の古墳出土の異形陶質器、同地にある四天王寺、望德寺、皇龍寺、昌林寺等の古寺址の現狀調査、若木の古墳群、扶餘の遺物に關する二三の起述等すべて八項である。二週間內外の短時日

の調査なので從來出た報告の如く一つの遺跡を詳述したものではないが、中で四天王寺址や望德寺址の如きは實測圖を添へて堂塔の配置を明示して基礎的の記載であり慶州に於ける石器關係事項の調査の如きも、梁山貝塚の概說と共にはじめて世に紹介せらるゝところであるから鮮明な圖版と參照するに於いて研究上の參考となるであらう。（總督府印行、非賣品）

◎朝鮮部落調査特別報告　第一册

同じく朝鮮總督府の出版で、大正十一年九月から十月に亘り今和次郎氏の調査した朝鮮民家に關する報告を載せたものである。四六倍版本文七十八頁、圖版四十一枚の大きい册子で、今氏の朝鮮民家の調査は既に一部分建築雜誌に發表せられたのであるが、こゝに纏まつたので先づ其の初に朝鮮民家の調査に於いて得た全體としてのあかるい印象を擧げて緒言に代へ、次に調査の中心をなす民家の構造及び間取りに關する詳密な記載を行ひ、溫突はじめ朝鮮民家の持つ特質を明にすると共に、進んでそれ等の上に表はれてゐる地方的の相違を論じて、間取りに北方型と南方型との二式あること、而して前者が我が內地の民家の四つ目の間取と密接な關係にあることを想定し、最後に今や內地人との交涉に依つて動きつゝある改良民家に及んで、隨所に興味のある考察を加へてゐる。行文輕快なるが上に、其の筆に成る家屋の構造や間取の圖には著者の創意に出た氣持のよい寫生があつて、兩者から朝鮮の民家が鮮かに描き出されてゐるのは特記に値しやう。たゞ此の好著が非賣品であるが爲に一般に行亘らないことを憾とする。（總督府庶務部印行）

◎董盦吉金圖

此の圖錄は大阪の齋藤悅藏氏が、其の珍藏に係る支那の古銅器六個を實大の玻璃版として知友に頒たれた立派な册子であつて、初にある內藤文學博士の序文に依ると、六個共に過ぐる戊午の年に山東長淸の民が地を掘つて獲た出所の確かな「フンド」であり、また形狀銘文などから雜振玉の商器と考定したものであることが知られる。一體支那の古銅器には出所の明なものや、伴出狀態の分明した類が甚だ稀である爲に、研究の困難の多いこ

こは學者の歎ずる處である。從つてこゝに載せられた如き優秀な一群の出所や共存の確められた事はまことに慶賀すべきことで、其の點から此の書は永く役立つものであらう。（齋藤氏印行、非賣品）

◉長野縣史蹟名勝天然記念物調査報告　第二輯

前年刊行の第一輯に引續いて大正十二年九月以降に委員諸氏の調査した同縣下の史蹟名勝天然記念物に關する報告二十四編を收錄したもの。其の史蹟の部にあつては今井委員の稿した大正十二年三月發見の諏訪郡平野村にある石器時代の竪穴に關する調査記錄をはじめ、埴科郡豐榮村、東條村にある屋根形天井の石室を有するケールンに就いての宮坂氏の研究、小山委員の小縣郡辰口の高塚古墳の調査報告、藤澤氏の寛政年間に多數の副葬品を出した更級郡川柳村の二古墳等の上代遺跡から、下は永祿四年の八幡原古戰場（鳥羽委員）眞田幸隆夫妻及昌幸之墓（藤澤委員）に及び、また特殊の史蹟として、北佐久郡芦田村の一里塚、長倉牧の遺跡、蓍御射山の遺跡等の記述があり、天然物に於いては「やまいたち」「ひめばらもみ」「八房栗」「名本としての榧の木」「同相生松」「椒魚、白馬溫泉の石灰華、南佐久郡川上村産の水晶等動物植物から鑛物にも亘つてゐる。是等の報告は十名を超ゆる委員の執筆なので體裁一ならず精粗種々あるが、各自專門の立場から要點を擧げてあるので研究者の手引としてはまことに重寶なものである。本報告書菊版百二十頁であるが內三十三頁は鮮明な網版の寫眞で、この中に專門家にも參考となるよい圖が含まれてゐる。（長野縣學務課印行）

◉奈良縣高市郡古墳誌

上代史蹟の中心である大和に於いて最も古墳墓が多く、且つ重要な意義を持つものを含む高市郡の遺跡の集錄であつて、郡衙の計畫に基き、同地の實地に精通した野上正篤、土井利顯二氏が主となつて編述したもの。菊版二百六十餘頁の本文に多數の挿繪を加へた冊子で、ほゞ三つの部分から出來てゐる。其の第一は總說であつて、我が古墳墓制の概要と副葬品とが例證を郡內の遺跡

遺物にとつてわかり易く說かれてあり、第二は御陵墓の章で、同郡內にある上代に屬する十數の陵墓に就いて關係の文獻を集錄して現狀にも及び、第三に於いて、郡內八百餘の多數の古墳墓を約三百項に分つて一々其の所在地と現狀とを明記し、重要なる遺跡にあつては內部構造の測圖を加へ、專門學者研究の業績をも引用して、記載の忠實を所期してある。

右の本文中我が古墳墓の沿革を論じた處には純然たる學術的見地からするとなほ議すべき點があり、また第三の古墳各說の挿圖にも實際に相違した粗雜なものを混じてゐる樣ではあるが、古墳の全部に亘り調査して忠實に記載した點は本書の最もとるべき處であつて、また御陵墓に關する文獻を集大成したことも後の研究者を利する處大であると思ふ。たゞ此の書印刷部數僅小の爲廣く一般に頒布するに至らないことを遺憾とする。（高市郡役所印行、非賣品）

◉古墳と上代の文化（增補本）

高橋健自著

前年文化叢書の一編として出版せられたものを、先頃改版に際し新に單行本としたのであつて、本文に若干の增訂を施すと共に、新に「埴輪より見たる上代の風俗」と「太古に於ける支那文化の傳來」なる二章を加へ、卷末に引用古墳地名一覽表を附載したもの、從つて內容はほゞ倍加すると共に、前の冊子が實は古墳墓構造の概說であつてやゝ表題に副はない觀のあつた點が除かれたわけである。其の本文の增訂に於いて方形墳に關する見解の改訂（三〇—三一頁）の如きは特記すべき一であらう。（雄山閣發行、價二・〇〇）

◉原始文様集

杉山壽榮男氏の編纂に依り工藝美術研究會から出版してゐる寫眞集であつて、菊倍版のコロタイプ版十枚に解說四頁を加へたものを一集として、昨年十一月第一輯を出し每月一回發行、十二輯を以て完結する豫定のもの今ま既刊の八輯分に就いて見るに、採る處の資料は我が原始文樣として最も見るべき石器時代の繩紋土器のそれを主として、土偶、土版、耳飾等の類をも含め、優秀品を

廣く全國に求めて精品を網羅せんことつとめてゐる上、其の遺物を印畫するに際して、從來行はれた單に形の寫眞だけに滿足せず、拓影に依つて全文樣の展開圖を併せ載せたのは文樣集としての名に副ふものであり、印刷また鮮明、考古學者にもまた藝術家にも役立つ處が多い。解說は東京帝室博物館の後藤守一氏の執筆に係ると云ひ、また要を得たものであるが、其の文樣の性質に關して氏特自の意見が可なり多く附け加へられてゐるのは此の圖集の性質なぞからして如何なものであらうか。（東京工藝美術研究會、價一輯一・五〇）

◉筑紫野民譚集　及川儀右衞門著

鄕土研究社發行の爐邊叢書の一編であつて、著者及川氏が同地に於ける二年の生活中、主として浮羽、三井、三潴等の地で採集した、河童の話、怪火の話、長者の話、神事及歌舞の話、山の神祕、水の奇傳の話、怪異の話の六類に分けた民譚四十六種を載せ、所々に忠實な注釋を附した菊判半裁百八十頁の冊子であつて、讀んで面白く、民俗の研究者はもとより、一般の讀者にも向く好著である。（鄕土研究社、價壹・九〇）〔以上梅原〕

彙報

◉慶州路東里二古墳の發掘調査

今年の五月から六月に亘つて朝鮮總督府古蹟調査課の事業の一として慶州路東里の二基の古墳の發掘調査が行はれた。それは墳墓が民家の間に介在して著しく封土を削り取られほゞ中心に達する樣に見えたので、破壞に先立ち學術的に調査しようとの齋藤總督の主意に基いたのであつて、當時滯鮮中の梅原京都大學囑託が囑を受けて澤、小泉、諸鹿氏等と協力事に當り、二基共に原形を遺存した主要部に掘り當てゝ多數の副葬品を發見し、殊に西古墳にては前年偶然見出された金冠塚のそれに匹敵する貴重な裝身具類を獲て考古學上稀に見る業績を收めたことは特筆に値する。今ま其の概要を紹介するに、發掘調査した二基の古墳は共に慶州の入口に聳ゆる鳳凰臺の南に近く存するもので、圓形であるが既に土饅頭の半以上を失ひ、且つ大さもさまで大きなものではなかつた